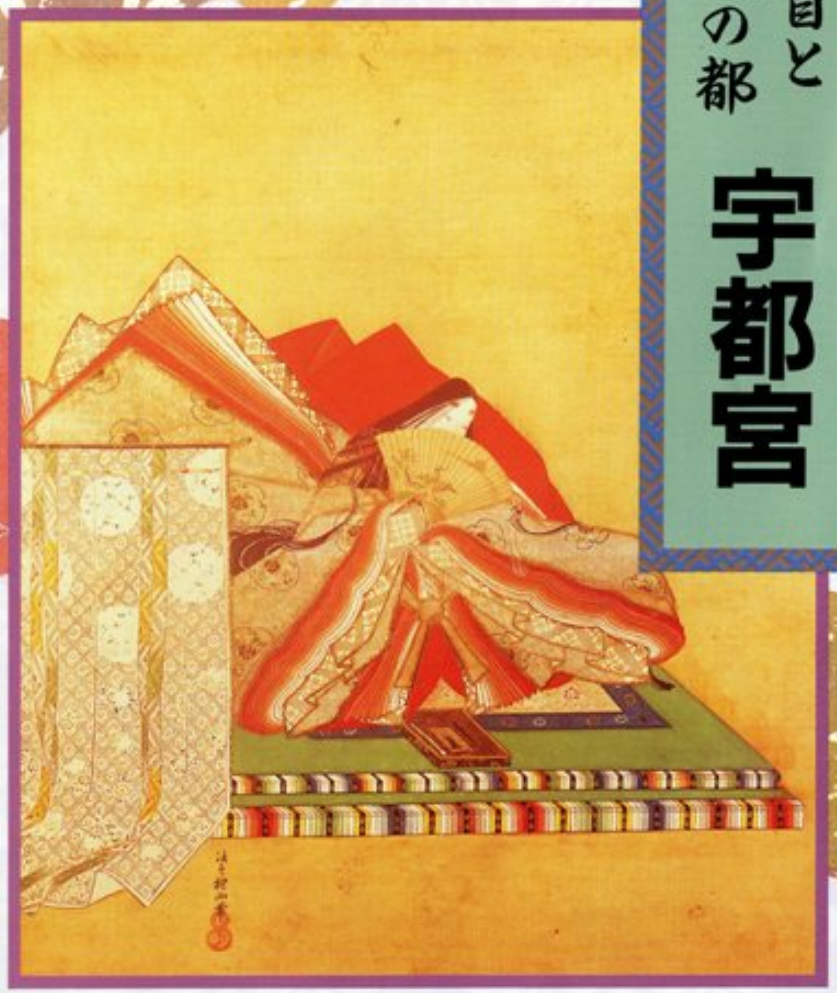
宇都宮には百人一首を生んだ歴史があります

百人一首と和歌の都 宇都宮



「百人一首画帖」
狩野探幽画（画帖）

百人一首、そして、かるた。伝統ある日本の文化が息づくまちに――。

百人一首は、単なる詩歌集としてではなく、歌が詠まれた時代の華麗な王朝文化を映し出し、江戸時代には、多くの人々に百人一首かるたとして親しまれ、また、様々な美術工芸品として、愛されつづけてきました。

この日本古来の貴重な文化である百人一首の誕生に、わたしたちのまち・宇都宮が深く関わっています。

宇都宮の子どもたちや、多くの市民の皆様に、この百人一首誕生の歴史や、鎌倉時代の宇都宮歌壇の歴史などを理解していただき、郷土への愛着を一層深めていただければとの願いを込めて、このリーフレットを作成いたしました。

日本語の美しい調べを持つ和歌、そして多くの人々に親しまれ、愛され続けてきた百人一首、伝統ある日本の文化を大切に守り、後世に伝えていきたいものですね。

宇都宮市

宇都宮と百人一首の関わり

百人一首のはじまりは、宇都宮頼綱（蓮生）が、藤原定家に色紙和歌をお願いしたことから始まりました。

百人一首は、藤原定家が、息子為家の妻の父、宇都宮頼綱（法名：蓮生）の懇望によって染筆した小倉色紙（小倉山荘色紙和歌）がはじまりです。後に、為家によって百人一首が成書となり、それが数多くの能書家による写本として現代に伝わってきたといわれています。

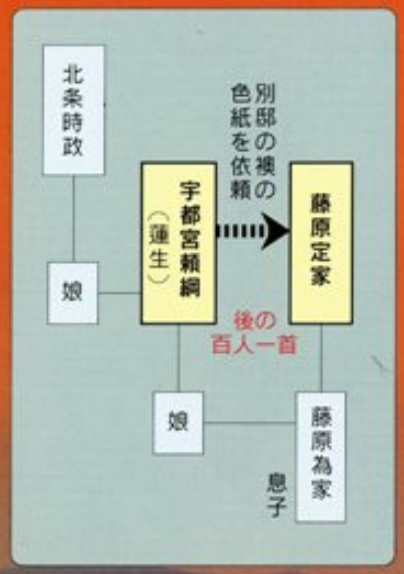
色紙の依頼者である宇都宮頼綱は、下野国宇都宮の五代城主で、一族は関東屈指の富強とうたわれ、その祖父三代城主朝綱は源頼朝の那須野の狩に千人の勢子を提供したり、東大寺再建のために六万貫の巨額を寄進したほどの財力があったと伝えられています。

頼綱の妻は北条時政の娘。たまたま時政の陰謀に加担したと三代将軍源実朝より嫌疑を受け、やむをえず出家して謝罪し、法名を蓮生入道と号し、京都小倉山の北側に中院山荘という住居を構えました。

和歌が好きだった蓮生は、藤原定家と懇意になり、やがて、娘は定家の息子為家に嫁ぐほどでした。

当時、神社・仏閣・貴族の邸宅などの襖や障子に色紙を貼ることが行われており、特に定家のような当代一の大歌人であり撰者の書いた色紙ならば別邸の誉れとなると蓮生は思い、襖の色紙を定家に懇望しました。高齢の定家は中風を患いながらもこれを承諾し、古来からの歌各一首、天智天皇より家隆、雅経に及ぶ秀歌百首を選んで送りました。

これが後に、さらに手を加えて百人一首として伝わるようになりました。つまり、和歌を愛した蓮生の懇望がなければ、百人一首は誕生しなかったのです。



【藤原定家】
（一一六二～一二四一）
御子左家の俊成の子。正二位権中納言。鎌倉前期の歌人にして古典学者でもあり『新古今和歌集』などの中心的撰者をつとめる。妖艶華麗、巧緻な歌風で新古今風を代表する。

【小倉山荘色紙和歌】
定家が蓮生の願いにより染筆した、別荘の襖に貼るための色紙形。為家がこれを書冊にまとめたものが百人一首となった。写真は壬生忠見と順徳院の句。
※徳川黎明會所蔵

【聚離庵（中院山荘跡地）】
百人一首の色紙形が襖に貼ってあったとされる京都嵯峨野の中院山荘（現在の聚離庵のあるあたり）。この山荘の新築祝いに色紙が書かれたとされている。定家の時雨亭も近くにあった。
京都にはこの他、蓮生寺跡など、蓮生ゆかりの地が点在している。

【蓮生入道】
（一一七二？～一二五九）
宇都宮五代城主。幕府に嫌疑をかけられ、出家して法然の弟子になり、蓮生と名乗る。京都に隠居し、朝廷関係になった定家に色紙形を依頼。これがのちの百人一首となった。

王朝文化の心模様
小倉百人一首

百人一首の選定にあたっては、定家の世界が色濃く反映されています。六歌仙、三十六歌仙の歌をさほど選ばなかったこと、それほど秀歌とされていないものも選んでいることなど、全体の流れを考え、人生の流れ、あるいは王朝の栄枯盛衰を見せる趣きで選ばれているかのようです。

天智天皇、家持、小野小町など、看板となる歌から始まり、人麿呂や赤人など典型的な古典を配し、やがて素直な恋愛、激しい恋愛、遊びの恋などさまざまな恋の歌を選び、その間に藤原氏時代の新しさや紀友則、紀貫之などの名歌を挿入して抑揚を図っています。後半では秋をテーマに人生や盛衰においての秋を感じさせていく配置がなされ、そして、枕詞など百人一首の技術的な面や成熟した美しさをならべ、その後は寂しい歌が続き、最後は後鳥羽院、順徳院の歌で王朝文化の最期を感じさせるという流れを持っています。まさに、人生もしくは王朝の隆盛を想起ける趣きにあふれています。

また、百人一首の選定にあたっては、読む人が老若男女、子ども、和歌を多少わかり始めた人、それぞれの性格的な違い（派手、地味などの志向）などを広く考え、多角的に選んでいる公平さにあふれており、江戸期に和歌の世界の入門書として絶大な人気を博したことがうかがえます。

およそ六百年の王朝文化をコンパクトにまとめあげた百人一首は、ただの詩歌文芸の範囲にとどまらず、歌の持つ絵画性が、画帖、屏風、掛軸、かるたなどのバラエティ豊かな百人一首絵を生み、さらに、芸能（能、文楽、歌舞伎、舞踊）、工芸（文台、硯箱、屏風その他）から生活全般にわたって、いわば、日本の美の規範として尊ばれ、江戸時代になると庶民の文化として一気に華を咲かせます。

なかでも「小倉百人一首かるた」は、日本人の美意識と連綿と続く王朝文化への憧れを庶民の遊びとして定着させたとともに、日常生活に文化性をもたらしたという点において、大きな影響を及ぼしました。

いわば、百人一首は、王朝文化と庶民化した江戸期の文化・芸術のタイムカプセルとしての価値にあふれているのです。

小倉百人一首かるた

そもそも、和歌は「歌合」として、人々が集まり、創作し、発表しては評価するなど、「社交性」に富んだものとして発達し、古くから「遊び」としての性格を持っていました。

「歌かるた」は「貝合わせ」とポルトガルから渡来した「うんすんかるた」が融合し、生まれたといわれています。和歌本来の「詩をもって遊ぶ」という要素を受け継ぎ、江戸時代になるとかるたは、貴族のみでなく庶民が気軽に楽しむことができる文化として愛されました。

もとより、和歌は、五七五七七という日本語の美しい響きを持ち、いつまでも残していきたい財産でもあり、言葉の響きのなかに、表現の綾（言葉の模様、色合い）を織り込んだ日本文芸の礎と言えます。

百人一首かるたの遊び方。

かるた遊びには、〈源平合戦〉や〈ちらし〉などの遊戯かるたと全日本かるた協会の競技規定によって行う競技かるたの二種類があります。

遊戯かるた

［ちらし］

百枚全部をその場にまき散らし、競技者は、その札のまわりに座り、読み上げた札を最も多く取った人が勝ちとする。

ただし、誤って他の札を取ったり、手をつけた場合は「お手付」となって、自分のすでにとってある札一枚を出し、あとで読み直してとりあう。

［源平合戦］

紅白二組に分れ、各々五十枚を持ち札として前に並べて、読まれた札を取りあい、早く持ち札がなくなったほうが勝ちとする。

［競技かるたの札の並べ方］

中央をあけ、中・下段に多く並べる

横ずわりで、左足に重心をおき身構える

ただし、敵方の札を取った場合は、その都度味方の札を一枚敵方に送り、また、読まれた札が味方にないのに、誤って味方の札に手をつけた時、また敵方にないのに、誤って敵方の札に手をつけた時は「お手付」となり、敵方から札一枚を受けなければならない。なお、正しい札が、誤って手をつけた札と同一陣内にあればお手付とならない。

競技かるた

一対一の個人競技（さし取り）。競技かるたの持ち札は各二十五枚ずつ。読み札が百枚あるので、両方の場にない空札が五十枚となる。

各自二十五枚の持ち札を、横八十七cm以内、上段は対戦者の札から三cm離し、三段以内に並べる。各段の間隔は一cm。分かりやすい句を手前から並べるのが必勝法とされている。

読み方は、競技かるたでは、最初指定された序歌（難波津に…）から読み始める。読み手は一字ずつ正確に、一定の速度で読む。次の札に移るまでの「間」を約三秒ぐらいで一定する。

「お手付」は、出札が自分の持ち札にないのに、誤って自分の札に手をつけるか、または、対戦者の持ち札にないのに相手札につけたときは「お手付」となる。お手付をした人は、その都度対戦者から札一枚を受け取る。送り札の選定は送者の自由である。このほか、競技かるたにはまだまだお手付のルールがある。

このように百人一首は、名歌を朗詠して行う優雅な遊びとして愛されてきました。同時に、始まりは「お願いします」、終わりには「ありがとうございました」と挨拶をすることなどマナーを大切にした遊びでもあります。

かるた上達法

百人一首の中には、「む」で始まる句が一首しかありません。また「う」で始まる句が二首というように。これらはそれぞれ、一枚札、二枚札と呼ばれます。二枚札ならば、「う」の次の文字、例えば「うかりける」「うらみわび」の「か」と「ら」の違いで聞き分けます。これを「二字定まり」と呼びます。

このようにして、同じ字から始まる句が何枚札で、何文字目の違いで聞き分けるかと、いうのが、上達が早くなる方法です。一枚札は「む・す・め・ふ・さ・ほ・せ」で始まる句というように覚えていきます。いちばん多いのが「あ」で始まる十六枚札。詳しいことは、百科事典やかるた競技等のテキストに載っています。

和歌の都　宇都宮の詩歌集

宇都宮一族編纂の『新〇和歌集』
中世初期に鎌倉に次ぐ有力な地方歌壇は宇都宮であった。宇都宮一族は勅選集に16人計119首を入集している。こうした時期にまとめたものが「新〇和歌集」である。（宇都宮二荒山神社写本）

日本美の規範　小倉百人一首

「百人一首一夕話」　尾崎雅嘉著・大石真虎画
百人一首の句の解釈から物語化して本にまとめたもの。江戸中期に読物として広く庶民に親しまれた。
（奥野かるた店所蔵）

「百人一首かるた」
江戸初期に作られた手づくりの百人一首かるた。葵の紋から大名が使ってたものらしい。
（奥野かるた店所蔵）

「百人一首画帖」狩野探幽画（画帖）
江戸初期の画家。幕府の御用絵師。武家精神に適合した絵画様式を創出、狩野派の基礎を築いた。

かるた札協力：奥野かるた店